

【東洋大学校友会学生研究奨励基金授与論文概要】 ホームレスの自己退所による路上回帰化の要因

著者	後藤 広史
雑誌名	東洋大学社会福祉研研究
号	1
ページ	53-55
発行年	2008-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005164/

●東洋大学校友会学生研究奨励基金授与論文概要

ホームレスの自己退所による路上回帰化の要因

平成16年度 社会学研究科社会福祉学専攻

2年 3530030004

後藤 広史

学位の種類：修士（社会福祉学）／学位論文審査員：主査 佐藤豊道・副査 古川孝順

【研究の背景と目的】

近年、いわゆる「ホームレス」と呼ばれる人々が急激に増加し、大きな「社会問題」となっている。それに伴い、現在、様々な支援策が講じられている。しかし、路上から脱出したいと願い、自らそれらの施策の利用を申請して、施設という一時的な住まいを得たホームレスが、自らの意思で再び路上へと戻ってきてしまう、つまり、「自己退所」してしまうケースが少なからず存在する。

このような「自己退所」という行為は、どのような理由、言い分にかかわらず、一くくりに「自己退所」というカテゴリーに括られてしまう。彼らが出て行った要因にも様々な要因があると考えられるが、その要因を明らかにしようと試みた研究は、現在のところ行なわれていない。本研究では、今まで数量的にしか把握されてこなかった「自己退所」という行為を、ホームレス自身に改めて問うことによって、どのような要因が彼らを「自己退所」に導くのか、そのプロセスを明らかにすること、そして、その上で、彼らのニーズに即した援助策を展開するための視点を得ることを目的としている。

【本論文の構成】

本論文の構成は、序章「研究の背景と目的」、

第一章「ホームレスの定義」、第二章「ホームレスの概要と援助」、第三章「先行研究にみるホームレスの自己退所状況及びその要因」、第四章「調査概要」、第五章「分析結果」、終章「考察」である。

【研究結果】

ホームレスは、『路上脱出の困難に伴う自立からあきらめの心境変化』（「路上から仕事を得ることの困難による自立のあきらめ」、「生活保護からの実質的排除による自立のあきらめ」という要因によって路上生活から抜け出すことをあきらめ、路上で生きていくためにはどうしたらよいかという方向に思考が傾斜していく。結果として、ホームレスは路上で生きていくために様々な資源、『路上で得られる仕事・収入』、『支援団体・法外援助』を活用し、さらには『就寝地点の形成』、『相互扶助』などの路上で生きていくすべを獲得していく。こうして『戻れる場所としての路上』が形成される。さらにそれが長期化することで『路上生活の慣れと反射的利益の形成』がもたらされ、その弊害として『将来的展望の喪失』をしてしまう。『将来的な展望の喪失』は、後述の施設の短絡的な利用や、あてのない短絡的な退所を促す要因ともなる。これらの『路上生活を固定さ

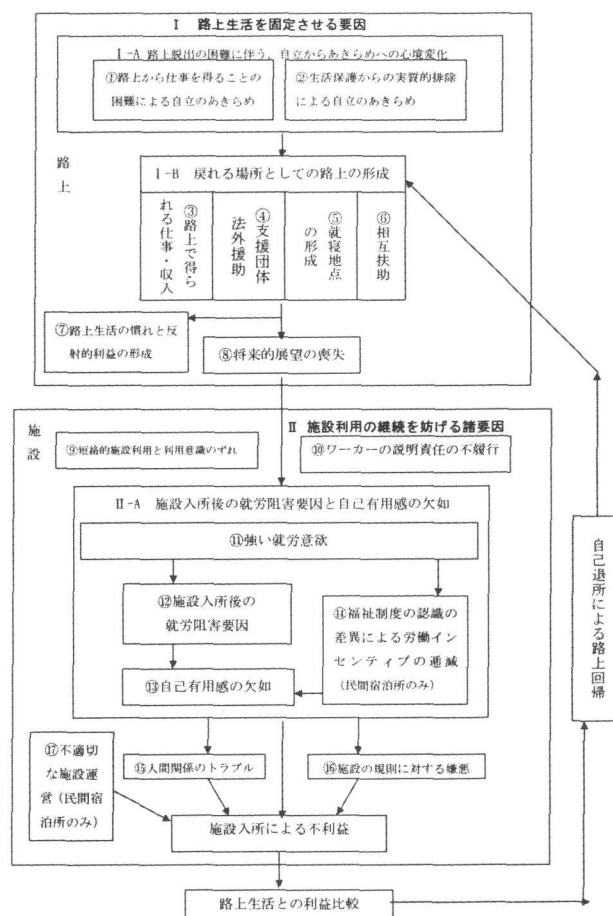
せる要因』によって、彼らは路上生活に固定されていく。施設の利用にあたっては『短絡的施設利用と利用意識のずれ』があり、また入所の際に『ワーカーの説明責任の不履行』が生じているため、受動的な利用が多く、施設に入ってから本人のサービスにたいする意識と、提供されているサービスとのギャップに苦しむこととなる。施設を短絡的に利用するホームレスも、外的な圧力や、『強い就労意欲』によって、仕事に就こうとするが、『施設入所後の就労阻害要因と自己有用感の欠如』（「施設入所後の就労阻害要因」、「福祉制度の認識の差による労働インセンティブの逓減」（宿泊所のみ）、「自己有用感の欠如」）によって、仕事に就けないばかりか、施設にいることに意味を見出せなくなる。こうして仕事を得るという目的や望みが絶たれたホームレスは、仕事に就けないことや、『人間関係のトラブル』『施設の規則に対する嫌悪』、さらに、これに加えて宿泊所の『不適切な施設運営』を施設入所による不利益と捉え、路上で反射的に獲得した利益との利益比較をおこない、路上生活のほうが良いという判断をする。これらの『施設利用を妨げる諸要因』によって、ホームレスは施設から自己退所し、路上に戻るという選択をすることが明らかになった。

【本研究の意義】

本研究を通してあきらかにされたことは、「ホームレスの自己退所による路上回帰化」は、決して自己退所をする個々のホームレスの個人的な性向のみに起因するものではなく、様々な要因が複雑に絡み合って生起している事象であるということである。このことは、自己退所の要因をホームレス自身に帰結させてしまうことなく、行われて

いる施策、援助を実情に即したものに作り変える必要があることを示唆する。同時に彼らのそうした行為にたいして、異なった角度からの「見かた」を提供することができたと思われる。それらを本論文の意義として最後に述べておきたい。

ホームレスが施設から自己退所する要因概念図



【審査及び最終試験の報告】

後藤広史さんの論文「ホームレスの自己退所による路上回帰化の要因」は、国レベルや自治体で対応を迫られているホームレスが施設に入所しても、自己退所して路上に回帰するのはなぜか、路上回帰へと導く要因は何かを明らかにした論文である。

本論文は7章構成である。序章では、研究の背景と目的を提示している。1章では、ホームレスの定義を狭義、広義の定義を提示し、社会的排除からみたホームレスについて述べ、ホームレスとは、「路上生活者のみならず、そうした生活に陥る高い危険性をはらむ不安定な住居、そこから行くあてのない施設、病院、シェルター等を長期住まいとし、または路上やこれらの住居を流動的に移動する者であり、社会的に排除されている者」をいう、と自ら定義を示している。

2章では、「ホームレスの概要と援助」について、全国調査、東京都調査などの調査を元に動向把握を行ない、生活保護、自立支援システム、法外援助について解説している。3章では、「先行研究にみるホームレスの自己退所状況及びその要因」について、更正施設、宿泊所提供施設などの厚生施設、宿泊所、緊急一時保護センター、自立支援センターなどの自立支援システムの施設などに言及するとともに、既存の代表的な5つの調査を子細に検討して、「ホームレスが施設から自己退所する要因」が明らかにねっていないことを抽出している。そして、本論文はこの要因を明らかにすることに主眼が置かれている。

4章では、研究方法の選択、施設の捉え方、理論的立場、サンプリング、データ作成方法、データ分析方法、データの信憑性などの「調査概要」を述べている。5章では、前章を受けて、18事例の「分析結果」を提示している。この分析結果は、「カテゴリー生成表」「カテゴリー生成のプロセス」などの作表をとおして、最終的には「ホームレスが施設から自己退所する要因概念図」としてまとめられた。終章の「考察」においては、社会保障制度再整備の必要性、路上の長期化を防ぐための

アウトリーチの必要性や支援団体の組織化の必要性を論述し、最後に今後の課題を指摘している。

口述試験では、4章「調査概要」と5章「分析結果」を分けしないで、1つの章（4章）として、タイトルを別にするほうがよく、終章は5章とするほうがよいのではないかという意見や、図の読み方や記述に仕方、「自己退所」に論点の軸があるのか、それとも「路上回帰化」にあるのか、などが指摘された。

本論文は、研究テーマの選定、先行研究や各種調査の渉猟、斬新な質的研究手法、得られた結果を論理的に体系化しえたこと、最終的には、「ホームレスの自己退所による路上回帰化の要因」を明らかにしえたこと、などが高く評価された。その結果、本論文は、修士（社会福祉学）の授与に該当する傑出した論文として審査会の意見が一致した。

（主査 佐藤豊道）